



活躍の場は増えているので、 理系女子は一步引かずに飛び込もう



近年は理系学部に在籍している女子学生が増えてきたものの、研究者としてのキャリアを選択する学生はまだ少ない。「理系女性の研究職としてのロールモデルが少ない」「職場環境や周囲の意識」といった、解決すべき問題は多いものの、研究職としてのキャリアを切り拓いている理系女性は確実に増えてきている。東京大学大学院で高機能バイオセンシングマテリアルの創成などに取り組んでいる高井まどか教授は、女性研究者が希少だった頃に研究職の道を選び、キャリアを拓いてきた一人。高井教授に研究職における理系女子のキャリア、活躍フィールドについて話を聞いた。

——高井教授は新卒で東芝に入社後、母校の大学院に戻って研究者を目指されたそうですね。理系や研究者の道を選んだ際の話聞かせてください。

幼少期は病気がちな子供だったので、母が私に合う薬を一生懸命探してくれました。そんな体験から将来は薬剤師など薬に関わる仕事に就きたいと考えていました。また、実家が金型工場だったこともあり「モノづくり」に対する関心も非常に高かったですね。プレス機や切削機に触らせてもらえるのが嬉しかったのですが、プレス機に挟まれそうになって工場への出入りを禁止されたこともあります(笑)。

高校の進路相談の際に先生から「高井は何かを創り出す仕事に向いている」というアドバイスをいただき、新しい薬を創り出すための知識を学べる化学系の学部に進むことにしました。理系の学部に行ったものの、当時女性はわずか、大学院に進むという女性はほぼゼロ。そんな環境だったので私も周囲と一緒に就職することに。新卒で入社したのは大学で学んだことを活か

せるということもあって、東芝の半導体部門でした。生産プロセス技術開発などに取り組んでいたのですが、実際に働くうちに「やっぱり研究職として自分のアイデアでイチから何かを創り出したい」という想いが強くなっていきました。とはいえ、学部卒の自分には研究職になれるだけの専門性はない。考えた末に再び母校に戻ることにしました。

——当時、1990年代は大学で研究者を志す女性は少なかったのではないですか

確かに当時は企業も大学も男社会で、女性が一人入り込んでも周囲の男性はどう扱っていたのかわからないという環境でした。それでも比較すると、大学は企業に比べ仕事の自由度（時間の使い方）が高いと感じました。近年は企業の方が女性の活躍を支援する制度や環境が充実している印象があります。さらに今では、女性とともに研究に取り組むのは当たり前で、職場の雰囲気も含めて女性はずいぶん働きやすくなっていると思います。

——近年は研究職においても女性活用の取り組みが進んでいるのでしょうか

大学や民間企業の研究職として活躍している女性は年々増えており、受け入れ側もその流れを様々な形で後押ししています。東京大学では2006年に男女共同参画室を立ち上げ、女性研究者が活躍できる環境づくりに取り組んでいます。具体的な施策としては、学内の保育室設置やベビーシッター育児支援割引券の配布などがあります。

ただ、こういった施設や制度は女性だけでなく男性にも使ってほしいですね。男性の仕事に対する考え方

や労働時間が変わらなければ、いくら女性側の環境整備が進んでも限界があります。将来を考えている女子学生の皆さんに言いたいのは価値観をともにできるパートナーをしっかりと選んでほしいということ。自分の仕事や家庭についてパートナーの理解がなければ、負荷がかかるのは女性です。男性の意識を変え、もしくは仕事や家庭に対する考えを共有できるというのは、女性がキャリアを考えるうえで非常に重要といえるでしょう。

——将来について考えている理系女子にメッセージをお願いします

女性は仕事に対してもっと積極的になってもいいと思います。女性のリーダー、役職者が少ないのは社会的な問題もありますが、女性自身も「家庭」を理由に仕事から一歩引いている方が多いという面もあります。昇進やプロジェクトなどせつかく訪れたチャンスを、家庭の事情を理由に辞退する方が少なくないんです。



高井まどか Madoka Takai
東京大学大学院 工学系研究科
バイオエンジニアリング専攻 教授

静岡県出身。1990年早稲田大学理工学部応用化学科卒業後、東芝に入社。1995年早稲田大学大学院理工学研究科修士課程、1998年同博士課程応用化学専攻修了、博士（工学）。1998年から科学技術振興事業団科学技術特別研究員、2001年に東京大学大学院工学系研究科マテリアル工学専攻助手に着任、2003年同講師、2007年同准教授を経て、2011年より現職。

●研究テーマ

バイオマテリアル創製（生体親和性の高い素材や新たな機能性を有する素材の研究）による早期の疾病診断や、人工臓器や再生医療といった次世代医療への貢献を目指す。

- ・細胞膜から啓発されたバイオインターフェースの精密創製
- ・高分子ナノ粒子、ナノファイバーを用いたイムノアッセイチップの開発
- ・ブロックポリマーの自己組織化構造を用いた細胞特異的認識バイオインターフェースの構築
- ・細胞—マテリアル間相互作用解析ツールの開発

これは日本だけの問題ではありません。MIT（マサチューセッツ工科大学）の若手准教授と話した際「子供がきたら研究は続けられないから、母国に宅配便で子供を送るわ（笑）」と冗談を言っていました。それでも日本の女性研究者が全体の1割程度なのに対して海外大学では3〜4割におよびます。「家庭と研究を両立している人は特別に優秀なわけではない」と思う方がいるかもしれませんが、決してそうではなく、意思を持って一歩踏み出せるかどつかが重要だと私は考えています。あまりネガティブなことはばかり考えず、「なんとかなる」の精神で飛び込んでみれば切り拓けることも多いのではないのでしょうか。

大学も民間企業も今は女性登用を積極的に行っているため、採用場面において女性が不利ということはありません。女性の活躍の場はどんどん増えていきます。女子学生は真面目で頑張り屋が多いので、もっと自分の意思を信じて好きな道に飛び込んでほしいですね。